

博士論文要約

戦時下における自由主義者の行動論理

—豊島与志雄、谷川徹三と中国との関わりから—

張 鈴

本論文は、それぞれ文壇と思想界で活躍した小説家豊島与志雄（1890-1955）と哲学者谷川徹三（1895-1989）を取り上げ、それぞれの小説、情勢に関する評論および彼等の周辺にある言説に対するテキストの分析と思想史的な解説を通して、中国を臨む心境、戦時下の思考と行動論理を解明し、戦前自由主義者の日中戦争期における役割を考えた。

戦後になって、戦前戦中の自由主義者は「オールド・リベラリスト」と呼ばれるようになり、若い世代の知識人によって棚上げされた。彼らは戦時下において、積極的な意味での革新を図ったが、軍部による圧迫を蒙った。この経験から、彼らには往々にして、戦争責任の自覚が乏しい。一方、彼等の戦前戦中の活動および戦争責任についての考察はあまり見られない。このような知識人の戦争責任問題を再考する第一歩は、知識人の戦時下の営為およびその論理を理解することである。本論文は、知識人の行動論理を把握し、それによって、知識人を理解し、戦争責任を追及した上での再評価を求める。このようにして、この論究では、知識人の戦争責任追及問題を、いままでの「協力／抵抗」による戦争責任有無の評価という行き詰まりから脱出させることを試みた。

本論文は序章、第一部（第1章から第2章まで）、第二部（第3章から第5章まで）、第三部（第6章から第8章まで）、終章、補論、付録、参考文献、初出一覧からなる。

序章では、本論文の背景、先行研究と方法論、本論文の構成を述べた。

【第一部 戦前戦中期リベラリズム総説】（第1章から第2章まで）は自由主義に関する概説的な論考である。

第1章「十五年戦争期文壇における自由主義概観——谷川徹三、豊島与志雄の再定位——」は、十五年戦争期文壇における自由主義の全体像を三つの時期に分けて自由主義の発展過程とその失敗を概観した。1935年前後、自由主義者は文芸復興、行動主義・能動精神を唱え、学芸自由同盟を結成した。それと同時に、文化擁護を実行するため、外務省の外郭団

体である国際文化振興会などの団体の活動にも協力した。自由主義は受け入れられると同時に、それに対する否定的な声も聞こえてくるのである。

1939年前後、自由主義者はさらに政治に接近し、文化擁護は続けられた。具体的に、筆者は教養論議、中国（汪兆銘政権）との文化交渉、岸田国土の大政翼賛会文化部部長の就任を検討した。知識人の大政翼賛会文化部部長の着任や、当時の首相である近衛文麿のブレイン・トラストへの加入は、政治への接近であり、軍国主義に癒着しつつあるように見えるが、それは、失敗も含め、神がかりの国家主義者との闘争の過程を示しているのである。

1943年前後、真の自由主義者は発言する機会が奪われ、水面下に潜入した彼等の行動には更なる調査が必要である。ただし、日中戦争勃発後にすでに現れていた、国家・政府への批判意識の欠乏は、自由主義者の失敗を示している。

第2章「〈教養〉の成立と谷川徹三の青春期」は、明治末期・大正初期に遡って、谷川徹三の中学校から高校までの内面的な成長史とその先輩たちの経験に対する考察を通して、大正期教養主義の生成を再考した。あえて本論文が主要な検証対象として設定する時期である十五年戦争期を離れるのは、自由主義は個人主義、個人の教養に基づくものであり、そういった教養を掲げた教養主義者と戦後のオールド・リベラリストの顔ぶれがかなり重なるからである。本章はまず、谷川徹三の中学校時代に書いた作文・高校時代の煩悶に関する回想の分析を通して、煩悶や覚醒した〈個〉と旧制高校という場との深い関わりを読み直した。次に、視野を広げて谷川の先輩に当たる藤村操、阿部次郎、安倍能成、魚住影雄（折蘆）、藤原正らの言説から、彼等の煩悶およびそこから脱却方法を考察し、〈教養〉と修養、煩悶、個人主義の関係を見直した。明治末期・大正初期に、個人主義の高揚が主体的な思考をもたらし、その思考過程において煩悶が生じる。修養と〈教養〉はいかなる主体を形成すべきか、いかに主体形成をなすべきか、という同様の問題に答えたが、煩悶脱出・主体形成の方法が異なると本章は結論した。すなわち、修養には理想的な人格像があらかじめ存在しているが、〈教養〉に努める人々は〈自己〉を価値判断の基準にし、〈自己〉らしい人格を追求する。また、修養は肉体鍛錬と精神鍛錬で理想的な人格へ近づこうとするが、〈教養〉は幅広い読書によって人格形成を目指すのである。

【第二部 豊島与志雄 その汎アジア主義】（第3章から第5章まで）は小説家豊島与志雄と中国の関わりから、戦時期の知識人の行動論理を考えるものである。

第3章「上海 1940——豊島与志雄の視界から——」は、豊島与志雄の1940年3月上海訪問を中心に、歴史資料や証言と照合して豊島の上海理解について考察した。「孤島」は日本部分占領下の上海の別称で、豊島の上海認識を分析する手がかりでもあるため、本章はまず「孤島」になるまでの上海の歴史を整理した。続いて、外交文書や同行者である谷川徹三

の講演から、この旅行が中日文化協会の成立を巡る日中間の交渉と関わることを証明した。いままで公開されていなかった豊島与志雄のノートを生かして豊島一行の旅程を整理し、豊島が共同租界と日本占領区域をよく往来したことを明らかにした。「上海の洪面」という文学テキストからは、上海の民衆を注視する豊島の視線に彼の熱い気持ちが見える。豊島は積極的に知識人と会談をしたが、「孤島」という言葉の使い方からみれば、豊島の知識人理解は正しいとは言えない。本章は豊島の善意と熱意を肯定した上で、上海を見る視線には日本中心のものが満ちており、現地の知識人との間には大きな隔たりがあったと批判した。

第4章「豊島与志雄と中国——ある汎アジア主義的な心情を中心に——」は、豊島与志雄の中国人を主人公とする小説を中心に、彼の情勢に対する言論を合わせて、1940年前後、戦争末期、および戦後の1949年の豊島の中国に託した理想を経時的に検討した。1940年の初めての中国訪問の前後、豊島は小説集『白塔の歌—近代伝説—』および一連の情勢に関する評論を発表した。そこから、豊島は日中戦争に「一種の内争的、内乱的な感じ」をみて、東洋に新しい文芸の復興を漠然と期待したことが分かった。戦争末期に書かれた小説「秦の憂愁」・「秦の出発」からは、豊島個人の考えが国家の政策と合致するようになり、軍の政策へ賛同したことが窺える。中華人民共和国の成立と同時に発表された小説「上海挿話」は豊島の戦争責任に対する自覚の乏しさを露呈している。同時に、豊島は同じ小説において日中のはざままで生きる理想的な人間像を創出し、日中友好運動に寄与した。戦時下の軍部への思想的な接近と戦後の日中友好の提唱は、「転向」や「豹変」に見えるが、そのバックボーンは汎アジア主義的な心情である。豊島はこの心情を戦前戦後に貫き通し、主体性のある思考も持っていた。そのことは肯定すべきである。一方、豊島本人は戦争末期の自らの言動を曖昧に糊塗(こと)し、戦争責任の自覚の乏しさを示した。この点は批判しなければならない。

第5章「東亜文芸復興の夢——日中戦争期「東亜文芸復興」というスローガンについて——」は「東亜文芸復興」という言葉を巡る、戦争末期の日中両国の思惑を追究した。この言葉は、豊島与志雄がはじめての中国訪問(1940年3月)後に、東アジアにも文芸の勃興が起るよう、という意図で提唱したものであるが、日本と中国(汪兆銘政権管下区域)で、どのような思想に基づくのか、そして、それを復活させるのか振興させるのかを巡って、広く論議された。日中両国は、汪兆銘政権の官僚である林柏生のラジオ講演の日本語訳や大東亜文学者大会という接点があったように見えるが、豊島の評論、中国側のおよび日本側の出版物のテキスト分析を通して、筆者は日中間に共通した西洋への憧れ、日本の日本中心の協力ないし統制の願望、中国における日本への順従／抵抗などの多くの不調和が共存していることを明らかにした。汎アジア主義的心情で「東亜文芸復興」の夢を持つ豊島は、不本意でありながら、日本のアジア支配に貢献した。

【第三部 谷川徹三 その文化国際主義】(第6章から第8章まで)は哲学者谷川徹三と中国の関わりから、戦時期の知識人の行動論理を考えた。

第6章「1930年代におけるオールド・リベラリストの東洋言説——谷川徹三の「東洋と西洋」論——」は谷川徹三の1938年から1939年に書かれた三つの同名の論文「東洋と西洋」を中心にして論考を展開した。まずは、日中戦争をきっかけに東洋と西洋という問題に現実感を持つようになった谷川徹三は、三篇の「東洋と西洋」で、「東洋」を肯定的に構築した上で、(アイヌまでをも排除した)日本の特殊性を強調したことを論じた。さらに、谷川の論を京都学派の「世界史の哲学」の系譜に置き、三木清の世界史の哲学や和辻哲郎の世界史的史観との親縁性を論証した。津田左右吉の〈東洋は一つではない論〉の否定および東洋概念の再構築において、谷川徹三の論は三木清のそれと一致している。一方、日本肯定や世界史的な見方には和辻哲郎の思考の影響が見られる。谷川徹三の東洋と西洋論は三木清の世界史の哲学と和辻哲郎の世界史的史観の間で振れ動いていることが分かった。

第7章「谷川徹三の平和主義思想——ラッセル等との比較を中心に——」は戦前戦中における谷川徹三と著名な平和運動家であるバートランド・ラッセルの思想的な同時代性を考察した。大正期には谷川徹三はラッセルに関心を示さなかったが、1933年の「戦争と思想」に表した反戦意識は文化国際主義と関連があり、ラッセルの〈愛国心に対する疑い〉に基づいた平和主義である。1937年の日中戦争勃発後、谷川徹三は文化的国際主義を支持し続けると同時に、平和のための戦争を支持する(相対的平和主義の主張)ようになった。1940年、ヒトラーの暴行に直面したラッセルも相対的平和主義を宣言したが、谷川はそれをラッセルのナショナリズムとして理解し、日本の軍事行動に対する「嫌悪」を表した西洋の政治家に対する自らの怒りと重ねた。平和主義、文化国際主義は戦争反対に繋がるはずだが、谷川の行動論理には戦争と平和への賛同が共存している。彼は中国に対して平和主義・文化国際主義を講じ、その連帯と日本志向をもって西洋と抗争し、日本ナショナリズムの伸張を求めようとするのである。

第8章「戦時下自由主義の限界——1940年代における谷川徹三の中国旅行と文化交流——」は谷川徹三の中国旅行を概観してから、中国人と関わりがある、中国語に訳された三種類の文章を読解し、戦時下の自由主義の限界を探った。ここでいう限界には二つの意味がある。一つは、日本国内の言論の自由の限界で、もう一つは、中国知識人が受け入れられる限界である。谷川は帝国の改善のために帝国批判をしたが、「承詔必謹」の軍部の論調とはまだ距離があるため、その発言が禁じられた。中国知識人にとっては、政治的な宣言や日本の自己批判よりも、日本理解と繋がる文化論の文章の方が受け入れやすい。文化で日中戦争の收拾を模索したのは、日本の自由主義者だけではない。中国知識人も中国ナショナリズムと

文化優先の考えをもって文化交流に熱心だった。文化擁護という点において、谷川は自由主義者としての限界点に立って、日本占領区の中国知識人と接点をもった。

終章では、自由主義者の時代認識・歴史評価と、日本と中国の自由主義者・知識人論を問題提起し、これからの課題を述べた。

なお、「東洋」(英語の orient、中国語の^{ドンファン}東方)という概念の日中の間の「言語横断的実践」を考察した一篇の論考「orient と東洋・^{ドンファン}東方」を補論として付した。前近代において、orient がマテオ・リッチによって中国語の「東洋」に訳され、日本にも伝わった。近代に入り、日本は「東洋」と「西洋」という対の概念を作り、それによって自国のアイデンティティが構築された。さらに、西洋諸国と競争して「東洋」を研究することによって、「東洋」を他者として退けようとした。1930年代以降、再び東洋(および東亜、大東亜)は一つと提唱し、西洋との対決を高唱した。一方、中国では、「東方」としてのアイデンティティが19世紀の末にようやく始めて現れた。また、「東洋」は近代まで、今日の東シナ海の一部や針路、および空想の海を指しており、清朝中頃から日本を指す用例が出た。20世紀前半、中国では(アジアを指す)「東洋」と「東方」の競争、「東洋」の二つの意味(アジアと日本)の奪還が現れた。「東洋」の意味を巡る攻防には日中両国の異なる自己のあり方が窺える。この論考は日中両国の言葉の繋がりである「東洋」を中心に、近代日本と中国のアジアを見る異なった視線を歴史的に整理した点で、本論文の視野を広げられると思われる。

最後に、「豊島与志雄 1940年3月中国訪問ノート」及び翻刻、解題を資料として付した。